

答申にあたって

立川市では、これまでも市民を主体に文化芸術振興が位置づけられてきたが、第5次文化振興計画の策定あたり、一層明確にしたことが特徴になっている。委員会では、第4次文化振興計画の現状と課題について協議し、文化芸術を取り巻く国と東京都の動向を踏まえながら、立川市の独自性を損なうことなく、さらに発展させていくことが確認された。

新たに、ウェルビーイングの向上を文言として盛り込むことも協議された。すでに環境としても整いつつあり、基本的な考え方として定着が可能との意見が大勢を占めた。背景には、「ファーレ立川アート」を中核にした活動は、立川市独自のものとして定着していること、市民自ら企画実施する事業が数多く展開されていること、立川市地域文化振興財団が主催する小学校訪問事業やキッズワークショップをはじめ、アーティストとの協働型事業も増えてきたことなどがあげられる。

文化芸術は市民生活に欠かせないもの、生活と結びついていることを、さまざまな環境の中で、だれもが実感できることをさらに進めていく必要がある。年間実施される事業の数は増えているが、市民に十分伝わっていないことや、団体間の横の繋がりが弱いとの指摘はこれまでもあった。今委員会では、全体を統括できるコーディネーターの役割や可能性についても議論され、「文化芸術コーディネーター」(仮称)を位置づけるための検討を提言した。

第4次計画の取り組み方針〈ふれる、たのしむ〉〈はぐくむ、ささえる〉〈つたえる、つなげる〉は、第5次計画でも引き継がれ、〈つなげる、ひろげる〉は〈つながる、ひろがる〉として、より発展性のある意味が込められた。実行していくための重点手法として、1. デジタルテクノロジーの活用、2. 多様な主体との連携、3. 立川市地域文化振興財団との連携強化を挙げた。

1. は、文化資源の有効活用やオンラインでの鑑賞機会の創出など環境づくりのために、2. は、市民、地域団体、民間事業者、教育機関など多様な主体と一層連携を図り、充実させるために、3. は、立川市、立川文化芸術のまちづくり協議会との連携をさらに強化し、地域文化振興財団の専門性と総合力を活かすためである。

ここに「だれもが身近に文化芸術に触れることができる、多様な文化芸術活動を支援します」を策定の目的に、第5次文化振興計画をまとめることができた。

立川市の文化芸術によるまちづくりは、地道でも着実に成果が現れている。アール・ブリュット作品の展示と鑑賞の機会も増えた。市民の活動を支える民間企業、施設、団体の文化芸術への関心も高い。2011(平成23)年にはじまった文化振興計画は、第4次までその都度見直ししながら更新を重ね継続してきたことは大きい。

市民や企業・大学・団体等と行政が一体となった努力の成果であり、立川市が、だれもが文化芸術を実感できる魅力あるまちとして、さらに発展していくことを願ってやまない。

最後に、ご多忙にもかかわらず熱意をもって策定に参加された委員各位、および、支援をしてくださった事務局の方々に心より感謝したい。

2025(令和7)年5月22日

立川市文化振興推進委員会 委員長 今井良朗